



Title	アジア太平洋論叢 第14号 序
Author(s)	赤木, 攻
Citation	アジア太平洋論叢. 2004, 14, p. 1
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/99998
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

序

今年、数年ぶりにアメリカを訪れ、東部の中都市に1週間ばかり滞在する機会をもった。いくつかの印象を持ったが、その生活スタイル、とりわけ垣間見られる食生活には、驚かされた。街中のコーヒーショップやデリカテッセンは、朝から大盛況である。おそらく、朝食を家庭で作ることは少ないのであろう。ハムバーグとコーラの類を買いテイクアウトする者が多い。サンドイッチといっても、ハムやソーセージ、タマゴ、チーズといったものをただパンに挟んだだけのものが多く、やたら大きいだけで味へのこだわりは見られない。しかも、高カロリー食品ばかりである。加えて、われわれと比べて、食べる量が極端に多い。コーヒーやコーラやジュースといった飲料の類も、最も小さいサイズでも日本のそれと比べると、桁違いに大きい。そして、何よりも目を疑ったのは、その食生活の結果であろう。街に溢れているのは、肥満の行軍である。以前の訪問でも感じていたが、今回はその比ではなかった。レストランで、太った人と普通の人の注文の量を意識して観察してみたが、明らかに前者の注文量は多い。多食と肥満の悪循環の行程に入った社会ではなかろうか。

しかも、使用食器や容器は、ほとんどが合成樹脂製である。スプーンやフォークもそうである。つまりは、使い捨てである。ついてくるティッシュペーパーの量も、不必要なぐらい多い。

総じて、アメリカは日常生活における膨大なエネルギーの消費国であり、節約や倹約という観念は少ないのではないかと思わざるを得ない。環境やエネルギーに対する関心が生まれてくる素地を、生活文化の中に感じるができない。少なくとも、アジアの生活様式とは、異なっている。今日、世界政治の場でアメリカの一国主義や独善主義が指摘されている、それはエネルギーの大量消費の側面にも表われているのではなかろうか。

『アジア太平洋論叢』(第14号)をお届けする。今号に掲載された論考は多様であるが、いずれも力作である。読者諸氏からの叱正をお待ちしている。

2004年6月

会長 赤木 攻